

時を知る (チャペルメッセージ⑥)

何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。生まれる時、死ぬ時／植える時、植えたものを抜く時／殺す時、癒す時／破壊する時、建てる時／泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時／石を放つ時、石を集める時／抱擁の時、抱擁を遠ざける時／求める時、失う時／保つ時、放つ時／裂く時、縫う時／黙する時、語る時／愛する時、憎む時／戦いの時、平和の時。

(旧約聖書・コヘレトの言葉 3章 1~8節)

時間とはいったい何でしょうか。私たちの多くは、日に幾度となく時計で時刻を確かめ、その日の予定を確認しつつ、時間に従って生活しています。しかし、私たち人間が時間を意識するようになったのは比較的最近のことであり、それ以前は誰も時計をもっていなかったし、分刻みの時間を気にすることはなかったのです。しかし近代以降、社会の近代化・工業化に伴い、効率的な生産や労働環境が求められるようになり、次第に時間を計って労働を管理するようになってきました。そしてそれ以降、人間社会はより厳密なタイムスケジュールのもとに、より合理的な生き方を追い求めてきたわけですが、どうやら最近ではそれが少し行き過ぎてしまったようなのです。事実私たちは、時間を用いて自分の生活をコントロールしているようでいて、実際のところは、刻々と時を刻んでいく時計の針によって逆に管理され、支配されてしまっているのかもしれない。

しかし、よく考えてみると、そのように時計の針によって計られる時間だけがすべてではないようにも思えてきます。例えば私たちの多くが、自分が幼かった時にはゆっくりと時間が流れていたように思えるのに、成長するにつれ、どんどん時間が早くなっているように感じるのはいったいどうしてなのでしょう (実際ほとんどの人が年齢を重ねるにつれ時間が経つのが早くなったと感じています)。あるいは、楽しい時間は早く過ぎ去るのに、退屈な時間や苦痛を伴う時間は長く感じるのはどうしてでしょうか。もちろん、そんなものは錯覚に過ぎず、時間は常に同じ速さで経過しているのだと言われればそれまでですが、たとえそうだとしても、私たちが感じる時間というもの、必ずしも時計の針によって計り尽くされるものではなく、むしろそのような量的な時間を越えた質的な時間が存在するように思えるのです。

今回引用した聖書の箇所には「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」とあり、「生まれる時、死ぬ時……泣くとき、笑う時……黙する時、語る時……戦いの時、平和の時」というように様々な時が記されています。古代ギリシアの人々は量的な時を「クロノス」、質的な時を「カイロス」というように区別して表現しましたが、まさにここに挙げられている様々な時は、時計の針で計られる量的な時ではなく、それを越えたところにある質的な時、すなわち、それぞれが固有の意味をもつかけがえのない時なのであり、そしてまた、何事をするにもそれに「ふさわしい時」と「ふさわしくない時」があるというのです。

先日、緊急事態宣言が解除されましたが、なおしばらくは自由に外出しにくい状況がつづくかもしれません。そのような状況のなかで時間を持て余している人もいるかもしれませんが、まさにこのような時にこそ、今は何をするのにふさわしい時なのか、今何をなすべきなのかという問いを常に抱きつつ、有効な時間の使い方を見つけていければと思います。